慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦前わが国経済学研究における社会政策学会の役割(その三) : 高野岩三郎と家計調査研究
Sub Title	The study of political economy and social policy association in the pre-war period of Japan (3) : Iwasaburo Takano and the study of family expenditure research
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.3 (1980. 6) ,p.321(1)- 344(24)
JaLC DOI	10.14991/001.19800601-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦前わが国経済学研究における社会政策学会の役割（その三）

——高野岩三郎と家計調査研究——

飯　田　鼎

(1) はしがき——高野岩三郎と社会政策学会
(2) 高野岩三郎の経済学方法論
(3) 統計学研究と「月島調査」

（1）

ドイツ新歴史学派の影響をうけて帰国した東京帝国大学教授金井延を中心に，明治29年，社会労働問題研究の私的な集まりとして設立された日本社会政策学会は，その後の十数年間にいちじるしい発展をとげ，会員数も増加し，次第に公的な学会としての性格を帯びるに至った。かくして明治40年（1907年）6月の例会席上，会員中より，ドイツ社会政策学会の例に倣い，大会を催すべきことが提案され，12月22日から24日にかけて，工場法を討議題目とし東京帝国大学において開催された。(1) 爾来，大正13年12月，18回大会を最後として，その活動が休止状態に陥るまで，日本社会政策学会は，ほぼ大正時代全期を通じてわが国最大の経済学研究の学術団体として，国公私立各大学および専門学校の教授のうち主として社会政策および労働問題研究者を網羅して精力的な研究活動を行った。それは経済学研究に大きな貢献をなしたのみならず，工場法の成立に象徴されるように，その後のわが国社会政策の動向やさらに広く一般世論に影響をあたえ，日本社会の前近代的性格を批判し，わが国の近代化を促進するのに一定の役割を果したことが指摘されよう。

高野岩三郎

とりわけ，学会が公的な経済学研究の団体としてその基礎を確立した1910年代初頭は，第一次大戦の勃発を契機とする世界

注(1)　これについては，社会政策学会史料集成編纂委員会監修『工場法と労働問題』（社会政策学会史料集成第1集〔復刻版〕），御茶の水書房刊，1977年を参照。なお，筆者はこの史料の意義について論じたことがある。（『三田学会雑誌』，第71巻第1号（1978年2月）

情勢の変化とともに，日本の経済社会も急速な変貌をとげつつあった時代に相当する。この時期にようやく，明治初頭以来，わが国に導入され来った西欧経済学は，古典派経済学，マルクス経済学，限界効用学派，新古典派などの支配的な潮流に棹さした河上肇，福田徳三等を中心として体系的な紹介と理論的深化が試みられ，第一次大戦後の昂まる民主主義運動を背景に，経済学が社会科学として国家権力の政策批判に起ち向おうとする気運さえ醸成され，日本経済学史上，特筆すべき一時期を形成した。まさにこの時期に際会して，社会政策学会は，経済学の理論的・歴史的研究の自由な交流の舞台として重要な役割を果したが，他方，この学会の発展拡大にともなって，現実の社会労働問題の解決のため，政策批判の学としての経済学が，しばしば政策提案の用具に擬せられる結果となった。こうした傾向は，新歴史学派＝社会政策学派にいわば宿命的につきまとう特色であるが，それは同時に，新歴史学派的方法に批判的なマルクス経済学あるいは社会主義的イデオロギーの上に立つ研究者の側からのはげしい反撥を買い[(2)]，1920年代に至り，両者の相剋が次第に激化し，学会の凋落を招く大きな原因となった。

社会政策学会が，第一次大戦後，労働運動の未曽有の昂揚，社会主義運動の勃興という，社会政策研究にとって，絶好な研究題材の中に位置しながら，その科学的分析を怠り，学会をして徒らに「イデオロギー的団体[(3)]」に堕する傾向を阻止することができなかった。この状況のなかで，高野岩三郎と彼を中心とする大原社会問題研究所の創立は，いわば例外をなすものであり，社会政策学会を構成する官公私の大学教授たち＝社会政策学者＝講壇社会主義者にたいして，その政策提案の姿勢に対抗する政策批判の態度をもってその調査研究活動を貫徹しようとしたものであり，「科学とイデオロギー」という古くして常に新しい問題を考える点で，あるいはまた「理論と実践」という社会科学の研究につきまとう問題の考察のために教訓的な事業であった。ここでは，以上の視点から高野岩三郎の日本の経済学研究における役割を中心に[(4)]考察することとする。

注(2) マルクス主義をはじめとする社会主義学説研究の発展に伴い，これにたいする社会政策学会の対応および社会主義者およびその他の批判派の側からする学会批判という形で，学会内部にひとつの波紋が形造られるに至った。後者の問題は1924年（大正13年）河上肇，河田嗣郎，神戸正雄等の学会離脱に代表されるが，前者はその根は深く，すでに学会草創期に片山潜の入会問題に端を発し，大正期に入って，友愛会会長鈴木文治の入会が問題とされた。これについては後段においてふれたいと思うが，大内兵衛氏稿「社会政策学会と高野先生」（高野岩三郎著『かっぱの屁――遺稿集――』，鈴木鴻一郎氏編，法政大学出版局，1961年4月，所載）にくわしい。

(3) 筆者はかつて，この学会の性格を，その成立の事情に鑑みて，イデオロギー的団体としてのその性格を論じたことがある。（「日本社会政策学会の成立と崩壊にかんする覚え書――社会政策学会史料集成編纂委員会監修「社会政策学会史料」社会政策学会史料集成〔別巻Ⅰ〕によせて」）『三田学会雑誌』，第71巻6号（1978年12月）

(4) 高野岩三郎の伝記としては，前掲の遺稿集が，自伝的性格をもつためにまず貴重である。つぎに大内兵衛・森戸辰男・久留間鮫造三氏の監修になる大島清氏著『高野岩三郎伝』，岩波書店，1968年，が高野岩三郎研究にとって不可欠である。なお高野の畢生事業としての大原社会問題研究所については，『大原社会問題研究所三十年史』および『五十年史』法政大学出版局，1971年）が，よくその成立と発展の経緯を伝えている。また高野の伝記というよりは，恩師あるいは大原社会問題研究所所長としての高野を語ったものとして，大内兵衛『高い山一人物アルバム』，岩波書店，昭和38年，および鈴木鴻一郎『一途の人』，東大出版会，昭和53年，が興味深い。

（2）

大正期における経済学研究の特徴を要約すれば，まず第一に，ドイツ新歴史学派の経済学が主流として位置し，社会政策学会がその中心となったこと，第二に，従来，国家学の一部として考えられていた経済学が，これから分離独立し，社会科学の重要な中核を構成するという認識が，わが学界に定着するに至ったこと，そして最後に，マルクス経済学の本格的研究が開始され，新歴史学派と対立すると同時に，資本主義批判のイデオロギーとして，第一次大戦後，流入し来ったもろもろの社会思想とともに，強力な時代思潮となって当時の社会に深刻な影響をあたえたことなどがあげられよう。

わが国における経済学研究は，福沢諭吉以来，ヨーロッパおよびアメリカ合衆国からのイギリス古典学派とその亜流およびドイツ新歴史学派の輸入紹介が主流をなし，日本経済についての実証的把握を目的とする研究はきわめて少なかった。明治36年，わが産業資本主義の確立期，しかもヨーロッパ資本主義諸国が，独占段階に移行しあった頃，わが国の労働者状態の科学的分析を試みた調査研究として，農商務省編『職工事情』[(5)]があげられる。なおこれに先立って，1899年（明治32年）に刊行された横山源之助『日本の下層社会』[(6)]が重要である。この二著は，今日，わが国経済学研究上の古典としての地位を占めているが，これらがいずれも大学の教職にある研究者によって生み出されたものではなく，ひとつは官庁出版物として世に問われ，他は民間の調査研究者の努力の結晶であることに注目しなければならない。後進的日本資本主義の制約からくる本源的蓄積の苛酷さ，農工間の跛行的発展，そして農村における相対的過剰人口の滞留と都市での「労働貧民」ともいうべき労働者階級の惨胆たる状態に，最初に良心的な眼を向け，その患部をおそれるところなく露呈させた者が大学の研究者でなかったという事実は，今日，われわれに考えさせる題材をあたえているのではなかろうか。高野岩三郎と彼を中心とする大原社会問題研究所の創立およびその活動は，日本社会政策学派の翼下に育ち，その学問的伝統から多量の栄養分を吸収摂取しつつも，それを超えて，科学としての経済学をどのようにしてわが国の土壌のなかに定着させるかという，それまでわが国では何人も考え及ばなかった重大な問題を，日本社会政策学会がイデオロギー団体への傾斜を

注（5）『職工事情』については，第二次大戦後の版としては，土屋喬雄校閲，全3巻，生活社版，昭和24年が普及していたが，最近，大河内一男氏の解説により，生活古典叢書（光生館版）4として刊行されている。

（6）『日本の下層社会』は，岩波文庫版がある。なお，横山については，従来，まとまった研究が少なかったが，最近すぐれた伝記的研究が現われた。立花雄一『評伝　横山源之助一底辺社会・文学・労働運動』，創樹社，昭和54年である。この著作の内容については，拙稿，書評（『三田学会雑誌』，第72巻第6号，1979年12月，所収）を参照。

なお，横山源之助の生涯については，その背景の把握という意味で，池田信『日本社会政策思想史論』，東洋経済新報社，1978年，が有益である。また拙稿「明治30年代における労働運動と知識人」（上）（『三田学会雑誌』，第70巻5号〔1977年10月〕）を参照されたい。

強めつつあったまさにそのとき，民間研究機関として提起したことのうちに重要な意義がある。

高野岩三郎は，明治30年代初頭，片山潜や横山源之助等とともに労働組合期成会の運動を通じて，わが国労働組合運動に偉大な貢献をした高野房太郎の実弟であり，当然兄の思想と活動から大きな影響をうけた。この卓越した労働運動の指導者としての兄の存在は，高野岩三郎をして人生の軌跡そのものを規定したとさえ云えるほどの重みを彼に感じさせたかもしれない。(7)

もちろん岩三郎が，兄房太郎のヒューマンな行動と労働組合主義者としての実践から深刻な影響をうけたことは疑いない。ただ彼は，兄の成しとげようとして果せなかった事業，すなわち，労働者階級の経済的自立・社会的地位の上昇を通じての日本政治の民主化・社会の近代化を，経済学研究を武器とする理論と実践によって完遂しようとしたのであった。その意味で，彼が統計学を専攻したことには重要な意味がある。和田垣謙三，金井延，桑田熊蔵等の先学が，官僚養成を目的として建設された帝国大学の主流ともいうべき国家学に代表される政治学の伝統の下で，その影響から脱け出ることができなかったのにたいし，高野が偶然の事情があったといえ，統計学を専攻したことは，社会労働問題を，イデオロギー的に理解するよりも計量的に把握することを，彼の学問的アプローチの方法の基礎におくことになったという点で重要な意味をもっていた。彼は，「統計学を専攻するまで」のなかで，早くから実証的な調査研究に関心をもっていたことをのべ，つぎのように述懐している。「一高中における私の処女作よりも，大学学生生活中における一編の論文ははるかに多く調査の形体を具え，私をして統計学との因縁の必ずしも偶然にあらざるを感ぜしむるものがある。それはすなわち明治時代の東京における貧民窟の調査に関するものである」。(8) 彼の統計的手法を利用しての社会問題の研究は，明治26年11月，ドイツから来日したばかりの若い講師アドルフ・フォン・ウェンクシュテルン (Adolf von Wenckstern) の指導の下に，「東京における貧民窟の状態」をテーマとし，友人落合謙太郎とともに実地に東京における貧民窟を探査して，この結果をとりまとめ，27年4月下旬，演習において報告したことから始まった。

この研究は，今日の水準からすれば，必ずしも卓越したという程のものではないが，問題はその先駆的な意義にある。チャールス・ブースのロンドン調査の影響をうけて，貧困の規定にしても，貧民の区分，すなわち，(a)安楽な生活を営む人々 (the comfortable)，(b)貧民 (the poor)，(c)極民層 (the very poor)，(d)浮浪人，不安定雇用労働者 (casuals)，乞食および半ば犯罪人 (semi-cri-

注(7) 高野岩三郎は，つぎのように記している。「ついでに私一身に関して記しておきたいことは，家兄房太郎のことであって，兄は明治十九年に年十九歳にして桑港に渡航し，始めは日本雑貨店を営み，その後は家庭労働のいわゆる皿洗いに従事するかたわら，労働組合運動に対する関心を深め，ついにA・F・Lのゴムパースと親交を結ぶに至った。せんだってもかたづけ物をしていると，兄の遺物の中からA・F・Lのマークや，日本におけるこの運動のagitator証などが出てきたので，今更の如く感慨に打たれたことであったが，私自身の社会観に対しては，この兄の存在は一の大きな影響を及ぼしたことはおのずから疑う余地がない」（前掲『かっぱの屁』，92～93頁）。

(8) 'East London in Tokyo' のことである。この論文は英文で書かれており，やや長くなるが，全文を邦訳してみよう。なお，これは，鈴木鴻一郎教授編，高野岩三郎著『かっぱの屁』，法政大学出版局，昭和36年，に所載の「統計学を専攻するまで」，同上，67～87頁による。

「東京におけるイースト・ロンドン」

目次

序論
第1章　イースト・ロンドンの小スケッチ
第2章　東京における3つの典型的な貧困地帯
a. 下谷萬年町
b. 四谷鮫ケ橋
c. 芝新網町
第3章　貧民の状態についての資料
a. 地方当局（the Local offices）の文書記録から作成された若干の統計表
b. 貧民居住地域の校長および管理者との著者の私的な対話
c. 著者個人の観察
d. 新設の貧民救済協会の組織者，原氏提供の資料
第4章　貧民救済協会の史的概観
貧民の状態——予備的見解
第1章　その地区の概観
第2章　人民の五階級への分類，以下の叙述の範囲
第3章　生活必需品の状態
a. 衣服および寝具
b. 食物
魚類，野菜，光熱，薪炭
c. 住居
地代，家屋構造等。
d. 健康および病気
e. 貧民の生活費
第4章　雇用
a. 雇用の種類
b. 労働時間
c. 賃金
第5章　心理的状態
a. 貧民の平和な性向
b. 若干の並はずれた期待
c. 迷信
d. 小供の教育
e. 犯罪
第6章　貧困の原因
第7章　結語

序論

第1章　イースト・ロンドンの小スケッチ

人は，ロンドンという都市の名前が語られるとき，即座に，にぎやかな商業活動，盛んな諸工業，華麗な街，すばらしい住宅などを心に想いうかべるであろう。だがこれはロンドンの明るい側面にすぎない。これとは逆に，暗黒面が横たわっており，たんに暗いというだけではなく，最暗黒とすら云えるのである。すなわちイースト・ロンドンは，まさに「イースト・ロンドン」という言葉そのものが，貧民と身をもちくずした人々の巣窟の代名詞となるほど深刻に，貧乏，困窮，窮乏および悪徳に満ち満ちているからである。このような状態に影響をうけた多くの人々のなかで，チャールス・ブース(Charles Booth) は戸別調査（house-to-house enquiry）を行い，その後3年間の調査研究（1886-1888）によって，その結果は，『人民の労働と生活，第一巻，イースト・ロンドン』と題する厖大な書物となってあらわれた。それは，科学的に物を考え且つ実践的である人々に貴重な素材を提供したのである。ブースが見積ったところによれば，この地域すなわちイースト・エンドの地域は，総数で900,000人の住民が住居するが，そのうち，三分の一以上（35.7パーセント）は，深淵な貧困にあるといわれる。ウィリアム・ブース（William Booth）（上述のブースとは全く別人）は，こうした地獄のような状態から貧民を救い出そうと決心し，熱情を抱きまた確固とした信念をもって起ち上り，救世軍を創設し，いまやその厖大な社会計画を実行しつつある。（詳細については，『最暗黒のイングランドおよびその解決策』（"In Dorkest England and

the Way Out"）をみよ。このほかに，トインビー・ホール，オックスフォード・ハウス，バーナンド・ホームズや病院などの貧民救済のための物質および精神的な多くの施設がある。イースト・ロンドンとはまさにそうしたところである。

第2章　東京における三つの典型的な貧困地帯

さて，ひるがえってわが国の東京に眼を転ずるならば，そこには，ひとつの大イースト・ロンドンのようなものは見出し得ないとはいえ，ほとんどあらゆる地域に散在した多くの小イースト・ロンドンをみる。これらのなかで，下谷区の下谷万年町および山伏町，四谷区の四谷鮫ケ橋および芝区の芝新網町こそは，もっともよく知られた，またより大きな貧民地帯である。そこで私は，これら三つの場所を典型的な例としてとりあげ，これらの地区に考察の範囲を制限することにしよう。

第3章　貧民の状態についての典拠

私は貧民の状態について語りはじめる前に，この報告書を作成するのに利用した典拠について若干言及しようと思う。

1)まず第一に私は，これらの地域の貧民について統計を入手したいと思い，四谷区役所を訪問した。しかしながらそこには，特に鮫ケ橋の貧民についての統計はなかった。そこでわれわれは，貧困地帯としての全鮫ケ橋にかんする統計をみずから作成しなければならなかった。何故なら，他の方法は不可能のように思われたし，またこうした仮設は，現実に不合理であるとは思われなかったからである。このようにしてわれわれ二人は，五度も区役所を訪問し，戸籍簿（Register）や他の公文書から統計表を作成した。すなわち，a)家族および人口数とその増減表，b)処刑された犯罪人の数およびその種類，これらの統計表の作成過程は，芝および下谷区役所の場合とまったく同じ方法で行われた。芝区にかんしては，私は，ひとりで二度も区役所に通った。これらの素材は，私の論文の第一次的な源泉である。私は，これらについてあまり強調しようとは思わないが，これだけでも，この場所の一般的な諸特徴と傾向は確証されうると信ずる。

2)第二に，人民と直接触れ合う人々から，貧民の実際の状態についてきくことが必要であった。そこでわれわれは，鮫ケ橋の230人の貧民世帯の管理者，江口辰五郎，鮫ケ橋のキリスト教慈善学校長，浅野直八，新網町141の貧民世帯の管理者，鈴木熊次郎を訪問した。われわれは友好的に彼らと話し合い，彼が話してくれた場所について記録したのである。これらがわたくしの情報源であるが，不幸にして，時間がないために，他の人々を訪問することができなかった。

3)個人的な観察は，貧民の状態についての事実を確めるためにもっとも重要なものであろう。だが同時に，それは非常に困難であり，多くの時間を必要とする。わたくしはただ各区について二度ほど簡単な観察をしたにとどまる。それゆえ，この種の典拠は私自身の部分についていえばきわめて乏しいものである。しかしながら，この点について私は，新しく設立された帝国済民会の組織者原十目吉氏から多大の援助と貴重な情報を得た。原氏から供与された素材が，この論文の重要な部分を成すので，そこで私は，彼とその協会についてここで少しく語る義務があるように思う。

4)帝国済民会の歴史的な小素描。原氏は，青森県の出身で，困窮者を救おうとする熱情に駆られて帝国済民会を昨年（1893年）1月，八戸(青森県)に設立し，2月の他の数人のメンバーとともにその故郷の町を出発し，旅行をした地方の貧民100世帯および1,000人を超える人々について調査をした後，6月に東京に着いた。それから彼は，調査研究にとりかかり，自分だけで貧民が住んでいるほとんどあらゆる地区の500世帯以上を訪問したのである。彼は貧しい人々を訊ねる時期として冬の季節を選んだ。というのは，寒さと飢えが貧民たちにもっともきびしく襲いかかるからである。そして，彼らの仕事の邪魔にならないし，それにまた細々とした所帯の問題についてくわしく観察するのに好都合であるという理由で，大抵は夕方，彼らの住居を訊ねた。彼は，貧民たちに，その家族について，雇用，生活状態，親類関係および貧困の原因などについて多くの質問を発し，前もって準備していた印刷された様式にその回答を記入してもらった。その上でその原因に従って何かしら適切な改善策を示唆したのである。彼はいま，そうした資料の蒐集および編集に従事し，その救済計画を実行に移そうとしている。

さてそこで，上述したこれらの史料に基づいて，この問題の主要な諸特徴について語ることにしよう。

貧民の状態

予備的考察

ここで私は，貧民居住地域の一般的諸特徴を列挙しておめにかけよう。すでにのべたように，この問題について，私のとりあつかった範囲は三ケ所に限られるが，私の研究から明らかになった多くのことは，東京のほとんどあらゆる貧民に一般的に云えることであるという事実である。私はもちろんのこと，原氏自身もまたこの叙述（statements）が完全で余すところのないものであるなどと公言するものではない。それどころか，多くの欠陥があり，ある種の事実は，私のいうところと相反しているかもしれない。とはいえ，その故に人は私をとがめることはできないように思う。そこで弁解の言葉をのべ，私の典拠から得られた事実だけについて語ることにしよう。

1)貧民居住地区の一般的概観

これらの地区の世帯および住民数は以下の通りである。

萬年町および山伏町（明治26年）

世帯数，1,281，人口（男）3,234，（女）2,818，総計6,052

鮫ケ橋，谷町（明治25年）

世帯数，1,079，人口（男）1,345，（女）1,184，総計2,529

新網町（明治25年）
世帯数——，人口（男）1,950，（女）1,462，総計3,412
総合計，世帯3,000以上，人口10,000人以上

世帯および住民数ともに増加しつつあり，貧民の増加傾向は国家の援助をうける人々が増大しているという事実によって，東京の場会，一般的に明らかである。

2)貧民の区分

上にのべた住民は，つぎの5つの階層に分類できる。

a)安楽な生活を営む人々（the comfortable）……このクラスに私は，普通の労働者，高級熟練工（higher class artisans），商店主および商店員のような貧乏線以上の状態にする人々を含めた。

b)貧民（the poor）……この「貧しい人々」という言葉によって私は，独立の生活や手から口への生存さえ辛うじて維持することが出来るにすぎない人々という意味に使った。この階級は，現在，他から何ものも援助をうけられないで，病気や何かほかの事故に襲われた場合には，忽ちのうちに「極貧層」という階級に転落するのである。

c)極貧層（the very poor）……この言葉によって私は，彼の所得ではその生活を維持するのに不充分であるばかりか，常に窮乏に脅かされている人々の意味に使った。この階級はさらに二つにわかれる。(i)現在の救貧規則の下で国家によって支持される人々，すなわち，老人，身体障害，孤児のような身よりのないまたは友人もいない貧民，(ii)国家の扶助をうけていなくとも，ぎりぎりの生存のためにある種の援助を必要とする人々

d)浮浪人，不安定雇用労働者（casuals），乞食および半ば犯罪人（semi-criminal）

e)犯罪人（criminal）

貧民居住地区には，以上にのべた諸階級が住んでいるが，それらの比率を確定することは，非常に望ましいけれども，不可能である。それでも「貧しい人々」と「非常に貧しい人々」が，大部分をしめると敢えて云うことができる。これは明白な事実であって，ごく表面的な観察をしただけでも，明らかになろう。原氏が個人的に調査した500世帯は，ほとんどこれらの人々によって占められている。以上の私の叙述は，これら二つの階層，すなわち「貧しい人々」と「非常に貧しい人々」にもっとも早く関連している。

3)生活必需品の状態

衣食住の三つの生活必需品を必要とすることでは，貧民も金持ちとまったく同じである。だが貧しい人々は，これらの必需品を手に入れるためだけに苦闘するのである。そこで私は彼らがどのようにしてこれらの欲求を満たすかをみてみよう。

貧民の衣服についていえば，それはただ，身体を蔽えば足りると云えば充分であろう。衣服がたとえほこりだらけのボロであっても，それをもつ者は幸福なのである。外出するときにボロ衣服さえもたない人もいるし，またやっと膝までしかない短い衣服でようやく寒さから身体を保護する者もある。

またたとえつぎはぎだらけの古い布でできており，うまく，ほこりっぽくそして寒々としたものであっても，疲れた身体を横たえるベッドのある者は幸福なのである！われわれは，夜具一枚で全家族が夜を過すという家族の例を数多く知っている。それゆえ貧民は，日中の労働のために全く疲れきってしまうのでなければ，眠ることはまったく不可能である。極端な場合には，畳の上に寝る者もあり，他の者は炭団（タドン）火の乏しいぬくもりを頼りに眠るのである。より乏しい地区には，貸蒲団屋（bedding loan agencies）というものがあるが，大抵の場合，貧民には貸してくれない。というのは，彼らが抵当にいれたり，売ったりすることをおそれるからである。

貧民の食物は，云わば犬猫のような家畜にも劣るといっても，おそらく人は信じ難いであろうが，事実がこれを証明する。カーライルが云ったように，「四足で労働する者は，二本の手をもった人がやかましく要求するすべてのものをすでに得ている」。食物としては，劣悪な米穀が最上のものであり，南京米や挽割米はまだ上等の方であり，さつま芋の切り刻んだものや糠を混ぜた粥は，最低のものである。

その上，貧民は残飯や魚あるいは野菜やスープを食物の材料とする。毎日，学校や兵営から安い値段で，これらの残飯が売られる店がある。鮫ケ橋の貧民は，この残飯屋が六軒もあるために，こうした種類の食物にもっとも恵まれており，利益を得ている。その価格は，通常つぎのようなものである。

残飯	4杯	1銭
焼き飯	6杯	1銭
残菜その他	1人前	1厘（1銭の$\frac{1}{10}$…訳者註）
残汁	1人前	2厘

魚屋の店頭にならべられた魚は，その客が貧民である場合には，鰯，塩鮭および干もの（dried fish）のような劣等のものである。また，魚の骨，頭や皮も売られ，人々は，これを買ってその食慾を満たすのである。

野菜やもっともありふれた種類の野菜の漬け物は，1厘か2厘で買える。

一般的に云えば，天気のよい日には貧民の裕工合も良いので，魚がより多く買われるが，他方，雨の日にはこれと反対で，

八百屋が繁昌する。灯火についていえば，すずや鉄の合金でつくられた「カンテラ」と呼ばれる容器を使い，それに5厘か1銭の石油を満たす。夜業をする人々を除けば，彼らはほとんど夜早く床に入り，極端な程度にまで灯火の費用を節約する。

彼らはまた，落葉を集め，木葉を拾い，あるいは5厘ないし1銭ほどの薪を燃やして暖をとり料理をする。要するに，われわれはつまらないものに思われるものも，彼らにとっては貴重なものなのである。

彼らの住居は，大抵の場合，いわゆる長屋と呼ばれる通常12もしくは13に分れる平屋家屋で，そのそれぞれの住居は9尺2間である。それらはまったくありふれた材料でまた造作も最低のやっつけ仕事で作られている。そしていまや既に，年とともにしかも粗略にあつかわれるので腐朽している。曲りくねった棟，傾いたひさし，破れた窓，板で補修した壁，天井はなく，破れた畳，腐朽している流し台などが，これら長屋の実際の状態である。すべては暗くしかもその内部は薄暗い。これは少しも誇張ではない。こわれた茶碗，土瓶，薬鑵などやその他のがらくたもののほか家具らしいものは何もなく，大抵の場合，これらの所有者である彼自身とまったく同じように使えなくなったものであり，あるいは使い古されている。これらの長屋の家々では，ひとつには出来上った食物が店で買えるために，かまどが備えつけられているのを見ることはきわめて稀である。

家賃は，その住居の大きさ，位置および古さなどによって非常に異なっている。それは月額30銭から90銭の間であり，ほとんどすべて日払い（すなわち，毎日1銭から3銭というように）であり，月ぎめで支払われることはそれこそ滅多にないほどである。長屋の管理人は，夕方，各戸を訪ね，家賃を集める。家賃は，貧民の家計では負担の重い項目で，それゆえ仕事がうまくゆかない場合は，彼らが管理人からきびしく催促されるのをおそれるとしても，それを支払うことはできない。私が訊ねた管理人の語るところによれば，定期的に支払うのは非常に少数の人々であり，大多数の貧民は，月に20回程度の支払いであるが，極端な場合には，月に7回あるいは8回で支払いをすませる。

一棟の長屋（one set of Nagaya）には，主屋から独立して建てられた共同便所がある。そしてその側に，ごみ溜め（何ともいえぬ悪臭を放つ）がある。ここから程遠からぬところに井戸があり，がたがたの井戸端やひどい排水状態である。

これがスラム街に住む人々の食物，住居および衣服の状態であって，彼らは，粗末な衣服を身につけ，惨めな寝具で眠りにつき，ほこりっぽい空気と栄養不良というひどい状態のなかで暮しており，その結果は，病気に襲われることになろう。彼らがもっとも罹り易い疾病が，皮膚病，胃病，肺病，咽喉の病気および眼疾であることはまことに当然である。このような衛生上の欠陥にもかかわらず，彼らは毎日よく働き，その身体のエネルギーを生き生きと発散させ，つぎに彼らはこのような衛生状態の悪さに長年のうちに全く慣れてしまっているのである。

この項目を終る前に，最下層の貧民は，わずか1銭か3銭でその生存を保つことができるという事実に注目しなければならない。その生活は何と安いことであろうか！　だが，ある場合には，その収入がこのようなわずかな額をさえ超えない場合もある。まことに憐れな存在ではなかろうか！

4)仕事

貧民がそれによって生活を維持する仕事は非常に多くまた多様であるので，私はこれを60以上と考えている。だがここでは重要なものだけをあげることにしよう。人力車，荷車挽き，日雇い，紙屑拾い，下駄修理人，煙草パイプ修理人，ガラス破片買入れ人，マッチ箱製造人などが，貧民地区における主な労働者である。彼らの仲間にはまた，赤蛙を捕えるために，みみずを掘り出したり，あるいは，ぼうふらを凍った土を掘りかえしてとることを仕事にしている人や公衆便所のつぼのなかに投げ棄てられた物を拾い集める仕事についている者も居る。

貧しい労働者の多くは，早朝から夕方まで懸命に働く。私はある婦人から，彼女が，午前5時もしくは6時から仕事につき，少し休息するだけで夜中の12時過ぎまで働くということを聞いたことがある。

彼らが仕事にたいする報酬としたうけとる賃金，いうまでもなく仕事によって異なるが，一般的に云えば，彼らが稼ぐ日々の収入は，3銭以上10銭未満である。人力車夫はもっとも多く稼ぐといわれるけれども，それにしても彼らの収入は，日に10銭を超えることは滅多にないのである。というのは，彼らは通常年をとっており，虚弱であるばかりか，半分壊れたような人力車で夜働くからである。このようにして稼いだ金銭は，家へ帰るやいなやすぐに家賃，食物および薪炭の支払いにあてられ，あとには何も残らない。成程，日雇労働者も，日に12銭から時には20銭も稼ぐが，その金銭は酒やその他のふしだらな目的のために費やされる。彼らが幸せだと感ずるのは，天気のよい日であり，雨が降ると屋外で働く労働者は仕方なく怠ける結果となり，生活の途はなくなり，飢餓と貧困が身近かに迫ってくる。そのとき彼らはどうすればよいのであろうか？彼らの仕事着を質入れするか，その乏しい世帯道具（house-hole vessels）を売り払う以外に何も方法がない。「長屋殺すには（刃物はいらぬ……訳者挿入），雨の3日も降ればよい」という諺は，この現実をあらわしている。

5)精神的状態

物質的な状態についてはすでにいろいろとふれたので，つぎに貧民の精神的状態についてのべてみようと思う。犯罪人および半ば犯罪人という場合を除けば，貧民階級に属する人々は，一般に平和な柔順な性向である。彼らは充分な食物や衣服はもっていないにもかかわらず，煽動されたりするような気質はまったく無く，滅多に軽犯罪をさえ犯そうとはしないし，他の人々を羨んだり軽蔑したりもしないで，毎日毎日，静かに働いている。これこそが，注意をするに値する重要な点であると思う。

minal)，(e)犯罪人（criminal）という分類も，ブースに従い，さらに自己の体験によって整理したことは明らかである。しかもこれが，明治27年にまとめられたことは，記憶するに値しよう。なぜならこの時期は，後に，兄，房太郎を媒介にして相識るようになる横山源之助が，島田三郎の推挙により，24歳にして毎日新聞に入社し，いよいよ下層社会探求者，優れたルポライターとしてのスタートをきったからである。その意味で，岩三郎の労働問題研究への関心は，後に横山の影響がみられるとしても，この時点では，おそらく兄房太郎の影響があったことは充分考えられる。だが，高野や横山が労働者＝貧民問題に手を染める前，すでに明治10年代の末期に，すぐれた都市下層社会の研究があった。その代表的なものは，明治19年３月から４月にかけて，大我居士と自称した『日

普通は，このように静かな気性であるのだが，時として彼らは，異常な気まぐれや希望に駆りたてられることがある。原氏が関係のある貧民の間では，彼らが，大きな災害や天変地異の勃発を待ち望みまた歓迎することがわかった。これは一見奇妙に思われるかもしれない。だが彼らがそうした大変事がおこるのを待ち望むのはまことに当然である。というのは，大火災，疫病および飢饉のような大惨事は，貧しい人々に多くの報酬をともなう仕事をもたらすことが確実だからである。彼らも災害や社会上の無秩序それ自体を願うわけではないが，これらの異常事態から，彼らが最大の快楽と考える物質的な慾望を満足させることができるような利益を期待するのである。この事実から，また彼らは精神的な快楽よりも肉体的な快楽を重んずること，そして，それを満足させるためにだけ働くことがわかる。

貧しい人々が宗教心に豊かであるというように断定するとすれば，おそらくそれは誇張であろうが，彼らが迷信深いということは事実である。どんな粗末な小屋の住居でも，そこには神棚（fired place for god）があり，朝晩礼拝している。貧しい人々は，病気にかかると，時々ほとんどくさった水のようないわゆる御水（"god-water"）を使うことがあるし，あるいは御符をおしいただき，そうして恢復を祈るのである。これは彼らが無学で且つ迷信深いことの結果である。とはいえ，それはひとつの理由としては，薬を買ったり，あるいは医者にかかることが非常に困難であるという事実にもよっている。

貧民の子供たちもまた，ほとんどみな顧みられず，学校へ通わせてもらえない状態である。そして貧民の子供達をうけいれる目的をもってつくられた小学校は非常に少ないかあるいはまったく存在しない。貧しい人々は，多く子供を生むということがよく云われるし，またそれが現実であるように思われる。かつて，萬年町で私は，算えてみると30人以上の少年少女たちが集まって街路上で遊んでいるのをみた。この子供たちの群集こそ，全く無教育のままにそして適当な保護もないままにおかれた貧しい両親たちのつぎの世代なのである。犯罪人について，ここで少しふれておくことが必要であろう。これらの地区に住んでいる人々が犯す犯罪のうちで，総犯罪数のうち過半数をしめるものは実に窃盗である。また多くの常習犯罪者もいる。そしてこの事実は，救貧政策が行われる場合に，われわれが考慮にいれなければならないことである。

6)貧困の原因

どのような原因で彼らは惨めな状態に陥るか？

われわれは，貧困の原因をつぎの３つにわけることができる。

a)世襲的な原因……貧乏は，貧民自身の過失によらず，親譲りに起因する場合がある。

b)内部的な原因……この種類の原因としては，貧民自身の怠惰，深酔，浪費および放蕩等によって貧困におちこんだすべての人々が含まれる。

c)外部的な原因……これは，災害，老齢，社会変化，疾病および大家族等のような不可避の外部的な事情による貧困の原因を意味する。

原氏の調査によれば，最初の原因はもっとも少なく，他方，第三の原因がもっとも多く，とくに疾病，子供が多いことや老齢によっている。

7)結語

以上が調査地区の貧民の状態である。惨めではあっても，彼らの数はそれほど大きいわけではないし，もしわれわれが，それほど高くないわが国の一般的な生活水準を想い浮べるならば，彼ら貧民の状態は，ヨーロッパ，とくにイングランドほど惨めではない。私のみるところ，日本では，イングランド，とりわけにロンドンほど，貧富の差は大きくないように思われる。すなわち，われわれのまわりの貧しい人々が金持ちにたいして何か憎しみを抱いたり，既存の社会秩序に不満を感ずるということを示す徴候は何もない。云いかえるならば，わが日本の国には，貧困問題は未だ現われていないのである。しかしながらわれわれは，こうした状態が，ヨーロッパの文明や産業制度が強力に侵出している今日の時代に長く続くことが期待できるであろうか？「否！」と云うことはむずかしいであろう。私は思うのだが，まさにこうした理由のために，現在は，貧民の状態を詳細に科学的に研究し，適正な貧民救助政策を考慮するのに絶好の機会である。まことに，イースト・ロンドンのトインビー・ホールの管理者バーネット師が述べたように，「日本は，貧民の処遇の仕方を西欧に教えることが可能である」。

本』の記者，桜田文吾の筆に成る「東京府下貧民の真況」および呑天と号し，後に王子製紙株式会社の専務取締役となった鈴木梅四郎の「名護町貧民窟視察記」である。[9] とりわけ前者「東京府下貧民の真況」は，高野も関心をもった四谷鮫ヶ橋町をその調査対象の一部としており，先駆的な探査ということができる。[10] しかし高野が，これらのルポルタージュからどのような影響をうけたかは明らかではない。

ともあれ，重要なことは高野が統計学の研究に志し，社会労働問題への接近の武器として統計学的・計量的手法を認識したことこそ，彼のその後の学問研究に重大な関連をもつものであった。間もなくドイツに留学し，そこですでに衰退に入っていたとはいえ，新歴史学派の巨匠ルヨ・ブレンターノの講座に出席するとともに，マックス・ヴェーバーの実弟アドルフ・ウェーなどの活躍したミュンヒェン大学を中心に，経済学研究に専心したが，とりわけケトレーやエルンスト・エンゲルの指導の下に，統計学を修め，わが国においては，当時理解されることの少なかったこの学問を輸入紹介すべく日本に帰ってきたといえよう。明治末期から大正初期にかけてのわが経済学研究は，圧倒的に新歴史学派の影響下にあったことはすでに指摘したところであるが，金井延，桑田熊蔵あるいは河上肇や福田徳三および堀江帰一に代表される人々は，新歴史学派経済学そのものと同時に，その背後に横たわる社会思想により多くの関心と期待をよせていた。すなわち，彼らは多くの場合ヨーロッパでの体験を通じて培われた社会改良思想をもって日本に帰り，この社会の後進性を批判し，近代化を推進し，その旗頭たろうとさえした。金井延や桑田熊蔵の場合には，工場法の制定運動にみるように，また福田徳三と堀江帰一とは，大正デモクラシー運動への積極的参加，そして河上肇は，後にマルクス経済学研究に専念するに至ったとはいえ，その『貧乏物語』を読めば明らかなように，帰国後の出発点を成したものは，普遍的なヒューマニズムに裏打ちされた社会改良思想であった。

ところが高野岩三郎の学問的方法論は，これとは異なって独自なものがあった。彼もまた日本社会の後進性を強く意識し，その近代化に熱烈な関心を抱いていたことは，実兄房太郎との関連にふれるまでもなく明らかであり，またそれなればこそ，後に深刻な政治問題にまで発展した国際労働会議に労働者側代表として出席することを承諾したのであった。[11] ただ高野の他の社会政策学会における有力な研究者との基本的な相違は，まず日本社会の現実の相貌をその美醜にかかわらずあるが

注（9） これらは，『明治前期の都市下層社会』西田長寿解説，生活古典叢書2（光生館版，1970年）に収められている。なお，明治期から大正期の都市貧民の研究としては，津田真澂『日本の都市下層社会』（ミネルヴァ書房，1972年）および中川清『戦前における都市下層社会の展開——東京市の場合』，（上）（下）（『三田学会雑誌』，第71巻3号および4号〔1978年6月および8月〕）が注目に値する。

(10) これについて筆者はつぎのような小論をまとめたことがある。「明治初期における労働者階級の状態にかんする資料——『明治前期の都市下層社会』および『職工および鉱夫調査』について——」（『三田学会雑誌』，第64巻7号）参照。

(11) この事件の経緯については，前記，大内・森戸・久留間監修，大島清『高野岩三郎伝』にくわしいが，労働運動の側からみたものとして，鈴木文治『労働運動二十年』が興味深い。また野田律太『労働運動実践記』をもみよ。

ままに直視することであり，経済学とはまさに一国の経済社会そのものの分析の用具以外の何物でもないという認識ではなかったろうか。ということは，高野岩三郎に政治・社会思想がなかったことを毫も意味するものではない。第二次大戦前，彼が労農党の委員長に擬せられたこと，また戦後，彼自身によって起草された「日本国憲法草案」[12]をみれば，人は，彼の心底には民主主義や社会主義にかんする芳醇な思想が豊かに秘められていたことを知るであろう。ただ彼は，経済学研究に関する限り，そうした社会政治思想ないし政治的イデオロギーの混入を極度にさし控え，まことに曇りない学問的認識の達成という態度をもって終始しようとしたように思われる。この点がきわめて重要である。こうした「知的廉直」こそが，わが国の歴史に稀にみる民間の研究所をして，第二次大戦前，戦中，そして戦後を一貫して存続させ，隆盛に赴かしめた所以であろう。その意味で，社会政策学会における高野岩三郎の地位は，他の何人にもましてユニークなものがあった。

では，その経済学研究における独自性とは，具体的にどのような点にあらわれたか。この点について，彼の研究態度およびこれに裏打ちされた実証的・統計学的研究――『月島調査』に代表される――を通じて明らかにしよう。

（3）

高野岩三郎を語る場合に，河上肇と福田徳三を無視することはできない。日本経済学史上，不滅の業績を残したこの両者は，強烈な学問的情熱と不屈の闘志をもって，高野に深刻な衝撃をあたえたことは疑いえないが，しかしその両者は，さまざまな側面で対照的なものがあった。ここでは高野岩三郎と河上肇との関係を，大原社会問題研究所の創立にかかわらしめて論ずることにしよう。

『大原社会問題研究所三十年史』によれば，それは1919年（大正8年）2月9日岡山県倉敷の素封家に生まれ，倉敷紡績株式会社の経営に成功して財を成した大原孫三郎によって大阪に設立された。産業資本家にして社会問題に関心をもった人は必ずしも少なくない。古くはロバート・オーエンが代表的であるが，わが国では例えば秀英舎々長佐久間貞一[13]にみるように，いわゆるヒューマニズムの精神から出発して労働者階級の組織化に使命を見出した者が典型的であったが，大原孫三郎の場合は，おそらくはオーエンや佐久間に強く影響されながら，彼らの場合とはやや異なり，社会問題への関心の根底には明らかにキリスト教があった。すなわち，1900年（明治33年），宮崎県出身の熱烈なキリスト教徒石井十次を知るに及んで，彼が創りあげた岡山孤児院に感銘した大原は，

注(12) 前掲，『高野岩三郎伝』，第二章共和国憲法と放送民主化，を参照。

(13) 佐久間貞一については，前掲，池田信『日本社会政策史論』をみよ。なお小松隆二「わが国における労働組合思想の生成―佐久間貞一と高野房太郎を中心に―」（慶應義塾大学経済学年報13）昭和45年を参照。

1902年，石井がその出張所を大阪に設け，愛染橋保育所，夜学校，同情館等をつぎつぎに開設して，孤児養育の外貧民療養，教育，職業紹介，免囚保護，売笑婦救済などの活動を展開するなかで，これを支援し，その後援者となって，その影響の下にキリスト教徒となった。[14] わが国におけるキリスト教の社会問題との関係については片山潜，安部磯雄，木下尚江等の明治の社会主義者の活動のなかでしばしば論じられるが，キリスト教とりわけプロテスタンティズムの産業資本家との精神的感化という点では，従来必ずしも明らにされなかった。その意味では大原の入信は，日本におけるキリスト教の産業資本家への影響についての顕著な例といわなければならぬ。

大原孫三郎

岡山県は，キリスト教伝道の先進地帯で，明治19年，東京，大阪，神奈川，兵庫の大都市の府県に伍して多数の信徒を擁し，人口に対する信徒数の比率もまた高いものがあった。とりわけ倉敷に近い天城に設けられた教会には，旧岡山藩士を中心とする武士層，商人および地主層が信徒となって布教に従事したといわれる。倉敷の信徒の中心は醤油醸造業を営む木村和吉，土着の薬問屋，林源十郎のように，士族というよりは生え抜きの製造業者や商人であるのが特徴的であった。[15] 明治初年以来，岡山に根を下ろしつつあったキリスト教を背景として，そうした地方の伝統と精神的雰囲気の下に，大原孫三郎は，はじめて稀にみるヒューマニズムを内に秘めた実業家として生長したのではなかろうか。

大正7年（1918年），日本の朝野を震撼した米騒動の結果，社会問題の研究は焦眉の問題としてにわかにクローズ・アップされ，大原孫三郎をして，たんなる慈善事業から独立の研究機関の建設を意図する社会改良家への途を歩むことを決意させたものと思われる。[16] これについては，大原の周囲に多くの協力者の陣営が出来上りつつあったことが注目されよう。いま1979年3月発行，法政大学大原社会問題研究所『資料室報』所載の「大原社会問題研究所物故関係者名簿」によれば，高野岩三郎の研究所所長就任時，1919（大正8）年，職員は，委員として河田嗣郎，米田庄太郎，高野岩三郎，研究員は久留間鮫造，戸田貞三，研究嘱託として森戸辰男，櫛田民蔵，北沢新次郎，臨時嘱託として銅直勇，植田好太郎，高山義三，庶務会計主任，鷹津繁義，図書主任，森川隆夫，司書，内藤赳夫，外に事務員数名であった。これらの人々のなかに，後に京大教授として社会問題研究で著名となった河田および早稲田大学教授の北沢，マルクス主義経済学研究に大きな貢献をなしとげる櫛田，久留間，社会学研究の先駆者戸田貞三，そして森戸辰男，すでに実践運動で高い評価をう

注(14) 法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所三十年史』，1954年，3～4頁。

(15) 工藤英一『日本キリスト教社会経済史研究—明治前期を中心として』，日本キリスト教史双書，文教出版社，1980，153～155頁。

(16) 前掲『大原社会問題研究所三十年史』，6頁以下。

けていた高山義三など錚々たる人材を擁していたが，しかし研究所が，名実ともに高野を所長として発足したのは，高野が，第一回国際労働会議代表派遣をめぐる問題を契機に東大教授を辞任し，またこれにつづいておこった森戸事件[17]によって東京大学を去った権田保之助，大内兵衛および細川嘉六が研究所員あるいは嘱託として入所した頃であった。ところで問題は京大教授，河上肇の入所問題である。これについて『三十年史』は，つぎのようにふれている。

「これらの新進助手の充実と共に，研究所の陣容にとって重要な人事は，河上肇博士の入所問題である。博士が評議員または研究員として入所の希望があること，そして場合によっては京大を辞しても入所する旨が櫛田氏を通じて伝えられ（1920・3・19），大いに高野氏を喜ばせ，しばらく大原氏その他評議員間にこの問題が相談せられ，一方，高野，河上両者間にしばしば交渉が行われた。この間幾多の曲折があり，結局河上氏は研究員とならず，六月に至り評議員に就任することが決定した。また同月より小河〔滋次郎〕評議員は同時に研究員となった[18]」。

だが，河上肇の入所問題は，1922年，研究所がいままさにその活動を開始しようとした時期に長谷川如是閑とともに再燃した。再び『三十年史』の叙述をかりよう。

「長谷川氏は，この当時，すでに大朝〔大阪朝日新聞……引用考註〕を辞して雑誌『我等』に拠り論陣を張っていたが，高野氏は河上氏と同時に長谷川氏にも研究員として入所されたいと勧誘した（1922・10・3）。しかし河上氏は同月二〇日高野，櫛田両氏を訪問し，研究員となるのは6ヶ月後にしたいと，就任延期を申入れた。その後河上氏の入所問題は容易に決定せず，翌一九二三年秋には，米田庄太郎，河田嗣郎氏を研究所の嘱託にすることを条件に，自らは委員，研究員に就任するも可なりとの意向を表明したりしが，高野，櫛田両氏らはこの条件を容れず，河上氏の入所はこの後も遂に実現するにいたらなかった[19]」。

河上肇の側に，どのような事情があったかはこの文面だけでは明らかではないが，もし彼の入所が実現していたならば，どのような衝撃を研究所にあたえたかを考えてみると，興味深いものがあろう。

河上は，1916年から『貧乏物語』を『大阪朝日新聞』に連載しはじめ，大原社会問題研究所が設立される直前の1919（大正8）年に，個人雑誌『社会問題研究』を創刊し，1930（昭和5）年までに106冊にのぼったが，その第1冊，大正8年1月号の「序」においてつぎのようにのべて，社会問題研究の重要性を訴えている。

「抑々社会問題とは何であるか。簡単に云はば，社会の大多数の人々が貧乏している，其を如

注（17）これについては，森戸辰男『思想の遍歴（上）—クロポトキン事件前後』，春秋社，1972年，を参照。なお，このなかで，「理想と現実」と題し，高野岩三郎および大原社研における研究の体験が記されている。前掲書，195頁以下。

（18）前掲，『三十年史』，29～30頁。

（19）前掲，『高野岩三郎伝』にも，河上の研究所入所問題をめぐる叙述がみられる。222頁，244頁参照。なお『五十年史』，38～39頁も参照。

何にして救済するを得るかと云ふこと，それが即ち今日謂ふ所の社会問題である。大多数の人々が貧乏して居るが為に，第一に，彼等は其肉体をば健全に維持して行くことが出来ない。……第二には，彼らは其精神をば健全に発育成長させて行くことができない，人並みの教育をうけたならば何等かの方面に衆に優れた人間となって，社会の為に少からざる貢献を為すべかし（ママ）多くの人々が，十分なる教育を受くる機会を有り得ず，折角持って生れた天分をば十二分に発揮することなくして，詰らぬ仕事の為に一生を送りつつある。甚しきに至っては，貧乏に迫られて其魂をも喪ひ果て，誠に生き甲斐の無い憐れなる生涯を送る者も少くは無い……」。

ここには抜きがたい人道主義，社会問題解決の方途として，道義論的観点に終始している点が印象的である。[20] 河上の人道主義的な立場は，この『社会問題研究』の発刊を契機とする彼のマルクス主義研究の深化，経済学研究を通じての共産主義者としての信念の確立の過程で止揚されていくのであるが，[21] とりわけ，1916年9月から12月にかけて，『大阪朝日新聞』に掲載され，翌1917年に単行本として発行され，河上の代表作とされた『貧乏物語』は，高野にも深刻な影響をあたえたことが考えられる。

というのは周知のように，『貧乏物語』は，大正5年9月11日から同年12月26日までに断続して連載され，洛陽の紙価を高からしめたものであったが，その上編の一章「いかにして多数の人が貧乏しているか」には，ラウントリー (Seebohm Rowntree) やチャールス・ブース (Charles Booth) のヨークおよびロンドンにおける貧民調査の紹介がされていることに注目しよう。高野の研究関心が，貧民調査を中心とする労働問題研究にあったことはすでに指摘したところであるが，『貧乏物語』から『社会問題研究』に至る河上の精進は，ロシア革命の影響や米騒動などの内外における一連の重大な社会的事件を背景に俄かにクローズ・アップされてきた貧困の問題をとりあげることによって，高野の調査研究にひとつの重要な刺戟になったのではないかと考えられる。しかし1919年当時の河上にとっては，「余は社会問題の根本的解決といふ事を最後の標準として，一切の社会政策を批評すると同時に，更に人間の道徳的定義といふ事を最後の標準として，社会問題の根本的解決の為の実行手段を是非するであろう」とのべて，「社会政策の批判」と「社会問題の根本的解決の為の実行手段」を力説しながら，彼自身の思想は，観念論者，理想主義者としての枠内にとどまっていたことは，続いてのべられているつぎの一節からも明らかである。

「人生の目的は各自の道徳的完成にあらねばならぬ。それ故，如何に病気を根治することが急務だとは云へ，肉を救ふが為に霊を亡してはならぬ。病気は飽くまで根治せねばならぬが，それは本来魂を生かす為なのであるから，病気を治療する為の手段が，魂を汚すが如き種類のものであってはならぬ。斯かる意味に於て，余は目的の為に手段を選ばんとする者である。手段

注(20) 河上肇『社会問題研究』（大正8年1月―第1冊―），弘文堂発行，4頁をみよ。

(21) この点については，杉原四郎・一海知義『河上肇――学問と詩』，新評論社，1979年，のなかの「河上肇と『貧乏物語』」（47頁以下）および「河上肇とマルクス主義」をみよ。

の末の末に至るまで，人生の根本目的に照らして出来得る限り潔癖的に之を取捨せんとする者である。それ故私は，此叢書に於ても，時折人生といふ事を考へるであろう」。

河上は，『社会問題研究』において，「マルクスの社会主義の理論的体系」（其一，緒言～其七）をはじめ，マルクス『賃労働と資本』[22]の邦訳，「社会主義者の観たる世界大戦の真因（其一～其三）から史的唯物論の理解に至るマルクス主義への認識の深まりが顕著であるが，その学問的志向は経済学の理論体系の模索というよりは社会問題解決の手段としての社会思想の追求に急であるのたいし，高野の大原社会問題研究所を中心とするこの時期の学問的活動は，たとえば，ブレンターノ『労働者問題』(Lujo Brentano, Die Arbeiterfrage) の読書会での講義，あるいはウェッブ夫妻の『産業民主制』(Sidney and Beatrice Webb, Industrial Democracy, 1920) の邦訳に象徴されるように，社会問題解決のための手法および接近において一方は，倫理的・道義論的傾向が濃厚であったのにたいし，他方は統計的・実証的な手法をとる点で対照であった。だが，社会問題解決のために，両者とも貧困の問題を提起していることは共通しており，むしろ河上の学問的影響を感ずるが，同時にまた社会政策学会の活動においては，河上よりも高野の方がはるかに積極的であったことからすれば，高野の社会政策学会における研究が河上を刺戟し，『貧乏物語』における「貧困」の問題提起を強く意識させたことも考えられよう。

河上は，理想主義，人道主義から出発してやがてマルクス主義，それも講壇マルクス主義者の制約を打破して終に共産党員としての実践活動への飛躍を試みた点でまことに特異なものがあり，従って彼の社会問題研究は，結論的には貧困の解消を資本主義の否定，共産主義社会の樹立に見出したのにたいし，高野の社会問題研究は，まず何よりも貧困の実態を実証的な手法によって把握することであり，その上で貧困の解決の方策を，社会政策のなかに見出そうとしたのであった。

高野は，その『統計学研究』の冒頭において，「クニースノ『独立ノ学問トシテノ統計学』を読む」を揚げ，ドイツ歴史学派の巨匠クニースのドイツ統計学研究における業績を評価し，「アーヘンワール派ノ，国家ノ記述ヲ実用ニ応ズルノ目的ヲ以テ論述スルノガ一ツノ学問トシテノ統計学デアル」という説にたいして，「方今多数ノ学者ノ見ル所デハ，統計学ハ正確ナル数字ニ基キ人間ノ社会的現象ノ内ニ貫通シテ居ル通則，法則ヲ発見スル学問デアルト云フコトニ一致シテ居ルヤウデス……」[23]とのべて，社会科学としての統計学の本質を規定している。注目すべきは，この書の最後の二章「独逸ノ小所得者家計調査ニ就テ」および「シッフ氏家計調査方法論」である。前者の論文は，高野が，1900年，「ドイツで行われた小所得者家計調査」(Erhebung von Wirtschaftsrechnungen minderbemittelter Famillien im Deutschen Reiche) についてその内容を紹介したものであるが，これによれば，従来，家計調査の主体は，エルンスト・エンゲルの研究[24]に代表されるように，「(一)

注(22) 前掲，河上『社会問題研究』，第4冊，99頁以下。
(23) 高野岩三郎『統計学研究』，大倉書店，大正4年，25頁。
(24) この研究の邦訳としては，森戸辰男訳『ベルギー労働者家族の生活費』，第一出版株式会社，1969年，がある。

其多クハ私人ノ調査ニシテ公共団体或ハ公的機関ノ進ンデ之ニ当レル場合少シ否公共団体ハカカル調査ハ余リニ人ノ私事ニ立入リ過グルモノト見做シテ寧ロ之ヲ避ルノ有様ナリキ従テ又材料ノ徴集，其整理編纂ニ就テ遺憾ナル所少カラザリキ」[25]という点が指摘される。さらに高野は，「(二) 且在来ノ調査ハ多ク寧ロ断片的ナリ個別的ナリ従テ調査ノ細ニ入リ微ニ亘レルハアリト雖モ之ヲ以テ全般ヲ推スニ足ラス又仮令調査ノ断片的ナラサル場合ニ在テモ之ニ包含セラレタル家計ハ比較的少数ニシテ家計主ノ職業モ多岐ナラス換言スレハ一定ノ地方ニ於ル一定ノ労働者階級ニ就キ其幾十ヲ調査スト云フガ如キ有様ナリキ，(三) 加之調査ノ方法ニ至リテモ多クハ日々記入サレタル家計簿ヲ取ルニアラズ簡単ナル調査用紙ヲ配布シ之ニ収入支出ノ諸項目ニ対スル金額等ヲ記入セシムルニ止マレリ又多クハ一週間一箇月ト云フカ如キ短期間ノ材料ニ甘ンシ一箇年ト云フカ如キ長期ノ材料ヲ得ルヲ敢テセザリキ」[26]とのべて，公共団体が調査を行った例をあげている。すなわち1900年に，ベルリン市統計局が行った142世帯の労働者家族の調査，1903年には908家族の家計についての調査および1907年，ドイツで行われた小所得者家計調査にふれているが，とりわけ最後の小所得者家計調査は，高野岩三郎に深刻な影響をあたえたものと思われる。その特徴は，調査様式として，質問項目(Fragenbogen) の代りに家計簿様式を採用したこと[27]，調査事項と(1)所帯主およびその妻の氏名，(2)所帯主の年齢および職業，(3)小供の数，その男女別およびその年齢，(4)その他の世帯構成員の性別および年齢，(5)所帯主たる夫，妻および子供の収入の総額，とくに子供の収入の場合には，そのうち父母に提供して家計費に充てられる額やその他の収入を区別して記入すること，最後に，(6)妻が家計のために支出した金額だけでなく，夫が家庭外で支出した金額をも含み，すべて家計のために支出された全部を詳細に記録するというものであった。とはいうものの，この調査について彼は全面的な批判を，「シッフ氏家計調査方法論」において展開し[28]，実はこうした批判こそ，すでに明治44年に行われたわが国の「細民調査」についてもむけられていたもの[29]ということができよう。すなわち高野は，1907年のドイツの調査は，所得3,000マルク以下の労働者ならびに職員の二階級に跨っているが，その総計852家族の地方的分布についてみるに，大都会34，中都会23，小都会31，田舎都会16，田舎地方20，合計125の地方から成っているが，問題は調査対象であった。すなわち，大都会3，中都会では，わずかにそれぞれ1家族の家計があげられたにすぎず，その他の大都会および中都会においてさえ，10家族以下の家計が調査されたにすぎなかった。これで果して学問的に有効な結論を導き出すことができるであろうか。こうした調査の実態にたいして，高野がつぎのよ

注 (25) 前掲，高野，610～611頁。
(26) 前掲，高野，611頁。
(27) 前掲，高野，616頁。
(28) 前掲，高野，622頁。
(29) 明治44年の内務省『細民調査』についての研究としては，前掲，中川清「戦前における都市下層の展開—東京市の場合—」および拙稿「第1次世界大戦中における労働者階級と労働者意識」（その1）（『三田学会雑誌』，第71巻1号，1978年2月）を参照。

うな論評を加えているのは，彼の見識を示すものであり，貧困の実態あるいは生活水準の科学的な究明と把握のための調査に，何が必要であるかを高野はつぎのようにのべている。

「要スルニ余リ広汎ノ地域ニ亘リ其間ノ比較ハ到底行ナヒ得ベキニアラズ寧ロ調査地域ヲ少数ノ都会ニ限リテ同数ノ家計簿ヲ集メ得タランニハ学術上ノ獲物ハ一層大ナリシモノナラン」[30]。

このこととならんで，この調査にたいする批判として，被調査者としての「家族の選択」の問題がある。彼は，「凡ソtypicalの家族ナルモノ存在スルカ」の問にたいして，「果シテ其ノ真ニtypicalナルカ否カハ調査ノ後ニ於テ判断シ得ヘキモ到底予メ之ヲ定ムルヲ得サレバナリ」として，とくに，「如何ナル家族ニ家計調査ヲ実施スヘキカノ前掲問題ト関聯シテ起ル所ノモノハ如何ニシテカカル家族ヲ探求スベキヤノ問題」を提起し，これについてつぎのように答えているのはきわめて印象的である。

「之ニ関シテハ調査実施ノ企ヲ成ルベク広ク人民ニ知ラシメテ希望者ヲ求ムルコト必要ナルガ殊ニ職工組合消費組合疾病扶助組合等ノ労働団体又ハ教員等ノ助力ヲ借ルコト太タ肝要ナリトス」[31]

以上にのべたように調査活動の場合，二つの基本的態度，すなわち，調査対象の選定，少数の都会ないし，局限された地域における同数の家計簿を中心として行われるべきことと，その調査を行うにあたっては，職工組合をはじめとする労働者大衆団体の協力を得ること，この二点を強調していることに注目しなければならない。何故ならば，この基本的態度こそ，後に1916（大正5）年，友愛会の協力により，「東京ニ於ケル二十職工家計調査」のなかで試みられ，後に「月島調査」のなかで，より具体的な形で実施されたからである。

すでに日本社会政策学会は，高野岩三郎の提案に基づいて「生計費問題」[32]を討議題目として，大正元年10月19日および20日，専修学校において開催した。この大会を契機として，大正期における生計費問題研究が本格化するといっても過言ではないが，しかし研究史的には，すでに明治19年3月25日，27日，28日，30日，4月1日，2日，4日，8日の8回にわたって，『朝野新聞』に連載された「東京府下貧民の真況」がもっとも早い時期にあたるが，その筆者が誰であるかはわかっていない。これにつづいて，大我居士と号した「日本新聞」の記者，桜田文吾の筆に成る「貧天地」と題する東京の貧民窟の視察記とルポルタージュ風の「饑寒窟探検記」との二部から成る貧民の生活記録が，それに続く[33]。やや下って，明治34年，横山源之助の『日本の下層社会』が現われ，古典

注(30) 高野「シップ氏家計調査方法論」，上掲書，630頁。

(31) 前掲，高野，635頁。

(32) この問題の学会における報告および討議については復刻版，社会政策学会史料集成編纂委員会監修，社会政策学会史料集成，第6巻，『生計費問題』，御茶の水書房，1977年（但し原版は1913年）を参照。

(33) これらは，『明治前期の都市下層社会』，生活古典叢書2，光生館発行，1970年，所収，なお，これについては拙稿「明治前期における労働者階級の状態にかんする資料—『明治前期の都市下層社会』および『職工および鉱夫調査』について—」（『三田学会雑誌』，第64巻7号）を参照されたい。

的地位を占める。この中間の時期，すなわち明治31年8月15日，9月1日，10月1日，11月1日，の『労働世界』の各号に高野は，4回にわたり「労働局設置の必要」という論説を掲げ，工場法の制定にともなって，工場監督官の業務すなわち工場法の実施状況の監視とは別に，労働者状態の科学的な把握のために，「統計局」あるいは「労働局」のような独立の調査機関の設置を提議している。(34) こうした彼の若い時代からの願望が，やがて大原社会問題研究所の設立となって具体化し，これを中心として，すでにのべた調査活動の方法および理念に立って，「東京ニ於ケル二十職工家計調査」および「月島調査」が実施されたということができよう。

この場合，高野の立場は，あくまでも労働者階級の生活実態の統計的・計量的把握であって，これを無視したイデオロギー的な観点や道義論ではなかった点に注目しなければならない。

高野は，「東京ニ於ケル二十職工家計調査」において，家族構成員3人ないし4人の夫婦と子供の世帯に照準をあて，その世帯主を年齢別にみた場合，満27歳以上30歳以下9人，満30歳以上40歳以下7人，満40歳以上50歳以下4人であり，その職業分布状況は，木工工場職工2人，鉄工場職工3人，製釘工場職工1人，機械製作工場職工3人，造船所職工1人，電気職工1人，瓦斯会社機関職工1人，護謨工場職工3人，織物工場職工1人，煙草工場職工3人，理髪業1人，にみるように，被調査対象世帯主が友愛会会員であるだけに，製造業や化学工業に働く熟練労働者であったことが考えられる。従って，その調査は，当時の日本における典型的な労働者世帯を対象としていたということができよう。

「之ヲ要スルニ二十世帯ハ東京ノ市部ト郡部ニ亘リ，一世帯約四人ヨリ成ル所ノ親族所帯ニシテ，多クハ三四十歳ノ所帯主ヲ有シ，其ノ職業所得ニヨリテ家族ヲ扶養シ，間々妻ノ内職ト子弟ノ収入ヲ以テ補助セルモノナリト云フベシ。則チ当初，予定シタル所ト大差ナキ家族ヲ得タルモノト称スベク，之ヲ指シテ理想的ノtypical family ナリト云フハ敢テ当ラズト雖幾分之ニ近キモノナリト云フハ決シテ不当ニアラザルベシ」。(35)

だがこのtypical familyなるものの生活実態にふれたとき，

所帯主の収入	12円余	所帯数	1人
所帯主の収入	15～20円，	所帯数	8
所帯主の収入	20～25円，	所帯数	4
所帯主の収入	25～30円，	所帯数	3
所帯主の収入	30～35円，	所帯数	3
所帯主の収入	53円余	所帯数	1

という調査結果に，高野は駭然としたのではなかったか。所帯主の収入が53円余という1所帯は例

注(34) 『労働世界』（但し複刻版），明治31年10月1日（第21号）所収，高野岩三郎「労働局設置の必要」をみよ。

(35) 高野岩三郎「東京ニ於ケル二十職工家計調査」（『家計調査と生活研究』，生活古典叢書7，光生館発行，1971年，98頁以下）を参照。

外として，15～20円という所帯が，8世帯にのぼり，妻の収入ある者の場合，最高13円32銭，最低35銭であったという。こうして労働者家計は，きわめて実感あるものとなったが，この調査の体験を基礎として，「月島調査」は行われたのであった。

「月島調査」については，すでに詳細な研究がなされており[36]，付加すべきものは少ないが，簡単に調査の内容にふれておくこととする。

「東京市京橋区月島に於ける実地調査報告」は，大正7年10月22日，内務省保健衛生調査会第七部会に，高野が委員として提出した議案，すなわち「実地調査案[37]」に端を発したものであった。高野が何故に月島を調査対象として選んだか，その理由について，彼は「第一篇総説」においてつぎのようにのべている。

「何故自分が此の如き案を立てたかと云ふに，先づ東京を以て我都会殊に大都会の調査の目的物として選択したことは異論はなかろう。そこで東京を調査するとして，今日直ちに東京全般に亘って調査を行ふことは事実到底不可能である。部分的に行ふの外は無い。さうすれば東京市内に於て，言はば代表的地域と思はるゝ一定の地域を選び，之を狭く併かし深く調査することが一良法であると考へらるる。所で東京の如き政治的中心地に在ては，多数の官公吏軍人連を包容する麹町小石川赤坂辺の地域も確かに一の代表地域であらう。又日本橋神田辺の地域も商業の中心として亦一の標本的地方であらう。併しながら東京民衆の多数は矢張り労働に衣食する賃銭階級者である。殊に大都会の常として東京には又人夫的労働に従事する者の数が夥しいやうに認められるが，労働者中の生粋と称すべきは依然熟練職工である。そこで多数の熟練職工家族の団聚する地域は東京の一代表地域と見て正当であらう[38]」。（但し傍点は引用者）

高野ははじめ，本所区の太平町，柳島梅森町，柳島横川町，深川区猿江町を実地調査した結果，本所区柳島横川町の一区劃が，精工舎をはじめ工場が各所に散在することによって最適地とみなし，ここを調査対象と定めたのであった。ところが，この提案は委員の賛成を得た反面，また小学校教師の家計調査への委員の関心もたかく，また他方，太平警察署の戸口調査によって，柳島森川町界隈は，熟練職工の家庭は比較的少ないことが判明した。そこではるかに所期の目的に適うところとして京橋区月島が選ばれたのだという[39]。権田保之助，山名義鶴および星野鉄夫を助手として，月島に大小四間より成る家を借りうけて調査所を開設，調査のための予備作業として，一般的状況視察，調査活動の支援を期待できる公的機関へは協力要請，すなわち，月島警察署，月島第一・第二尋常小学校，月島幼稚園，救世軍労働者寄宿舎などへの訪問による月島の住民および児童にかんする資

注(36) 上掲叢書6，『月島調査』の関谷耕一氏解説が優れており，参考とされたい。なお，同叢書7『家計調査と生活研究』における中鉢正美氏の『解説』も貴重であるので，参照のこと。

(37) 高野岩三郎「東京市月島における実地報告」前掲，叢業6，『月島調査』，47頁以下，参照。

(38) 高野岩三郎『月島調査』，生活古典叢書6，48頁。

(39) 高野，前掲書，48～9頁。

料の入手などを経て，小学校長，警察署員，医師や月島在住の労働者の助力によって家計調査応募者の物色および決定に至ったのである。(40)

調査の実施については，「書類上の調査」と「実際上の調査」とにわけ，前者においては，東京帝国大学法科大学経済統計研究室，月島警察署，月島第一・第二尋常小学校，京橋区役所等における統計資料，警視庁統計書，東京市統計年表，明治41年東京市市勢調査原表および内務省の承諾の下に，大正2年から5年に至る4年間の東京市人口動態統計小票を基礎として，月島に関する出産，死産，死亡，婚姻および離婚の小票の抽出による人口動態の把握を行い，後者の場合は，（第一）月島の社会地図作製のための実地踏査，（第二）児童身体検査，（第三）労働者の身体検査，（第四）労働者家族栄養調査，（第五）長屋調査，（第六）衛生関係の職業の調査，（第七）小学校衛生調査，（第八）工場労働調査，（第九）労働家計調査，（第十）小学校児童の家族関係，（第十一）飲食店調査，（第十二）寄席の実地調査，（第十三）露店調査及通行人調査，（第十四）写真撮影，の各方面にわたって行われた。

後者，すなわち「実際上の調査」についてその各項目をみれば，労働者家族の生活調査に基本的な住居，衛生，環境，栄養の問題および児童の教育など，明らかにチャールス・ブースのロンドン調査を範としていることがわかる。

以上の要領に基づいて，大正7年11月，月島に調査所を設け調査を開始して以来，大正9年12月，調査所を閉じ，報告書を作成するに至るまで，約二ヶ年半を要したのであった。そして第二編「月島と其の労働者生活」は，権田保之助が執筆し，第三篇「月島に於ける労働者の衛生状態」は，星野鉄男が，そして第四篇「月島の労働事情」は，山名義鶴がこれを執筆している。ここでは，この三つの報告の内容に詳細に立ち入ることを目的とするものではないので，本報告において高野が日本の労働者階級の実態を，どのようなものとして理解したかは結論的にのべることとしよう。その場合，もっとも参考となるものは，権田保之助の執筆にかかる「第二篇月島とその労働者生活」のうち，とくに「第十章労働者の家計状態」がある。これは，すでに友愛会の協力の下に行われた『東京に於ける二十職工家計調査』と関連して，両者とも高野が重要視していた家計簿による家計状態の調査という方式の点で，労働者の生活実態の比較的把握という点で注目すべきものであった。

この月島における家計簿調査は，「月島警察署，月島第一，第二尋常小学校々長始め職員および工場における労働者諸君の尽力により，高野博士始め嘱託等の奔走によって」，家計簿記入の有志90余名を求め，大正7年11月より，半ヶ年ないし一年間の記入期間の予定ではじめられたものであった。しかし，「九十有余の記入応募者中，完全に記入を終ったものは四十であって，しかも其の内一箇年間継続記入を為したる特志家は僅かに二家族に過ぎず，六月以上を記入したるものは総計

注(40) 高野，前掲書，50～51頁。

十三家族[41]」にすぎなかった。この40世帯は，京橋区月島（佃島，新佃島及び月島）の在住者であって，家族構成は，3人ないし5人家族がもっとも多く，女子の占める割合は45.78パーセント，その最大部分は夫婦世帯で，年齢も所帯主は30歳ないし40歳，所帯主の妻は25歳ないし30歳，所帯主の児女は10歳未満の者が大多数を占めたという。問題は，この40家族世帯主の職場であるが，

機械製作工場職工	21人
造船所職工	14
海軍造兵廠職工	1
精米所職工	1
紙器製作所職工	1
鍛冶職（自営）	2

いま大正期における労働者の実態を明らかにするために，高野が，友愛会会長鈴木文治の協力を得て行われた「東京ニ於ケル二十職工家計調査」と比較して論ずることにしよう。「二十職工家計調査」によれば，年齢構成は，満27歳以上30歳以下9人，満30歳以上40歳以下7人，満40歳以上50歳以下4人で，その家族の居住地は，芝3，麻布1，京橋1，下谷2，本所3，深川2，以上市部居住者12名，大井町1，下大崎1，南品川2，角筈1，日暮里1，吾妻1，大島1，以上，郡部居住者8名となっている。ところで職業分布は，

木工工場職工	2人
鉄工場職工	3
製釘工場職工	1
機械製作工場職工	3
造船所職工	1
電気職工	1
瓦斯会社機関職工	1
護謨工場職工	3
織物工場職工	1
煙草工場職工	3
理髪業	1

問題は，所帯主の収入であるが，

所帯主の収入	12円余	所帯数	1
所帯主の収入	15～20円	所帯数	8
所帯主の収入	20～25円	所帯数	4
所帯主の収入	25～30円	所帯数	3
所帯主の収入	30～35円	所帯数	3
所帯主の収入	53円余	所帯数	1

注(41) 高野，前掲書，115頁。

いまこれを「月島調査」における40世帯[42]と比較するとどのような対比が見出されるであろうか。

所帯主の収入	30～40円	所帯数	6
所帯主の収入	40～50円	所帯数	4
所帯主の収入	50～60円	所帯数	9
所帯主の収入	60～70円	所帯数	8
所帯主の収入	70～80円	所帯数	6
所帯主の収入	80～90円	所帯数	4
所帯主の収入	100円以上	所帯数	3

「月島調査」と「二十職工の家計調査」に見られるいちじるしい差異は，後者が大正5年5月から1ヶ月という非常に短い期間の家計簿記入であるのに対し，前者は，大正7年11月より，1ヶ年間，完全記入は2家族，6ヶ月以上の記入者は13家族という状況の差異にある。これについて「月島調査」は，「之を高野博士の二十職工の家計調査の結果に比するに，所帯主の収入の割合の高増せるを見るのである。これ蓋し本調査の当時月島は機械工業全盛の時期に際し，該工業労働者の収入比較的多かりしが為めであると思はる[43]る」とのべている。他方高野は，「二十職工調査」の調査対象について，「之ヲ要スルニ，二十世帯ハ東京ノ市部ト郡部ニ亘リ，一世帯約四人ヨリ成ル所ノ親族所帯ニシテ，多クハ三四十歳ノ所帯主ヲ有シ，其ノ職業所得ニ依リテ家族ヲ扶養シ，間々妻ノ内職ト子弟ノ収入ヲ以テ補助セルモノナリト云フベシ。則チ当初余ノ予定シタル所ト大差ナキ家族ヲ得タルモノト称スベク，之ヲ指シテ理想的ノ typical family ナリト云フは敢テ当ラズト雖モ幾分之ニ近キモノナリト云フハ決シテ不当ニアラザルベシ[44]」。

「二十職工」家族が，果して typical family であったかどうか必ずしも科学的根拠があるわけではない。いわんや月島の労働者40家族が，当時の日本の典型的な労働者家族であったかどうかも明らかではない。しかしこの両者はその調査時点での社会状況を反映して，いくつかの重大なことを示唆しているのではなかろうか。

まず大正5年5月から同7年11月までのわずか2年半の間には，ロシア革命の影響と米騒動というまさにわが国の朝野を震撼した大事件が介在し，とくに米騒動は，大戦中における物価の昂騰にたいする労働者大衆の抵抗運動としての意味を秘めている。この二つの調査対象の家計が，労働者階級の典型的な例であったかどうかは別として，彼が当時の平均的な熟練労働者であったことは異論のないところであろう。だとすれば，この二つの収入状態の差異は，彼らの生活の変化の実態を証明するものとなる。支出状態について「月島調査」はつぎのようにのべている。

「四十世帯の記入延月数百八十三箇月に於ける支出総額は一万三千四百五十四円六十六銭に達

注(42) 高野，前掲書，117頁。
(43) 高野，前掲書，117～8頁。
(44) 高野岩三郎「東京ニ於ケル二十職工家計調査」（『家計調査と生活研究』，生活古典叢書7，中鉢正美解説，1971年，98頁）。

する。而して所得中，一月平均支出額の最小なるものは三十八円七十四銭三厘，其の最大なるものは百三十六円六十二銭であって，全体を通じ一所帯一月平均の支出額は七十三円五十二銭一厘に当っている。之を大正五年五月に行はれたる高野博士の二十職工家計調査に表はれたる一所帯平均支出三十円九十四銭八厘に比する時は甚しい増額を示している。これ物価騰貴の影響を見ることが出来ると思ふ」[45]。

このように，第一次大戦中におけるいちじるしい物価騰貴の現実に立って，さらに「月島調査」はその消費支出を分析し，月島の労働者の困窮を明らかにし，「二十職工の家計」との比較において，日本の労働者階級の窮乏化を科学的に実証しようとしている。

「而して何れの所得に於ても飲食物費が約五割を占め，之に住居費を合算する時は六割である。かくて生活必需費が七六・三二％乃至七八・三〇％を占め，総支出の四分の三強がこの為めに費さるゝと云ふことは特に注意すべき点ではあるまいか。尚之に保健衛生費を加ふる時は支出総額の八一・五三％乃至八三・六〇％となるのである。之を高野博士の二十職工家計調査の結果を対照せしむれば，住居費を除いて，生活必需費中の他の項目は何れも其の割合を高騰せしめ，殊に飲食物費は一割前後の増高を示して居ることは生活難の程度の進めるを語るものではあるまいか」[46]（傍点引用者）。

まことに高野は，日本の労働者階級の困窮した状況を，社会主義者的熱狂や改革者的情熱というよりはむしろ，冷厳な統計的・実証的手法をもって一般に訴えようとしたのであった。

*　　*　　*

高野岩三郎が果した役割は大きい。統計学の紹介と普及，友愛会を中心とする労働組合運動にたいする理解と協力，東大経済学部の法学部からの独立への献身，大原社会問題研究所を中心とする労働問題研究への貢献と日本の社会科学研究の推進など，多くの業績が数えられる。彼はいわゆる社会主義者ではなかったが，その意義と役割とを充分に評価していたすぐれた社会科学者であった。彼にとって使命として意識されたところのものが，もしあったとすれば，それは，一体何であったろうか。当時の日本の社会を根底において規定していた前近代的な遺制に挑戦すべく，経済学的分析の手法，とりわけ計量的な方法をもって，日本社会の諸矛盾を衝き，それらを白日の下に曝すことによって，わが国の近代化に役立たしめることであった。この点で，社会政策学派の重要な一翼を担いながら，金井延や，桑田熊蔵とも，あるいは福田徳三や河上肇とも異なっていた。「曇りなき学問的認識」の重視という点で，彼の態度はマックス・ヴェーバーにもっとも近く，同じくマルクス主義者とはいえ，河上と対立する櫛田民蔵をその門下に擁したことは象徴的である。思うに，

注(45)　前掲，『月島調査』，119頁。
(46)　前掲，『月島調査』，124頁。

「近代と前近代」にかかわるポーレミックな日本資本主義論争の課題も，根元的には，高野と河上から発すると云っては，云いすぎであろうか。

（経済学部教授）